



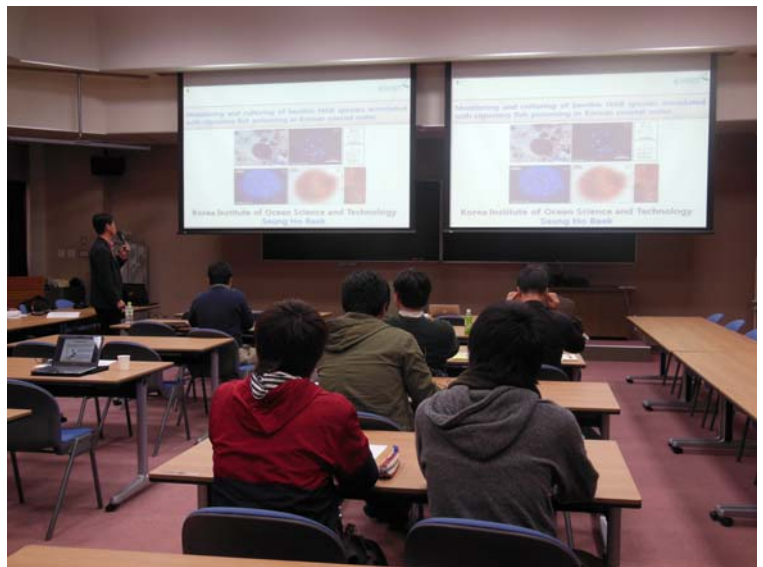
## Contents

- P. 1 国際研究集会の開催報告
- P. 2 地域防災に関する講演会の開催報告
- P. 4 前海を考えるシンポジウム開催報告
- P. 5 有明海学—市民の科学講座開催報
- P. 6 ISLT2014受付延長のお知らせ
- P. 6 着任挨拶

## 国際研究集会 International seminar on metapopulation studies on microalgae in coastal waters of East China Sea and Yellow Sea 開催報告

去る11月26日火曜日に、微細藻類に関する国際セミナーを、佐賀大学にて開催しました。このセミナーは、佐賀大学国際交流推進センターの支援を受けて、当センターが開催しました。

近年、有明海では、赤潮が頻発しています。2000年の海苔の色落ち以降、有明海では、多くの赤潮に関連する野外調査が行われてきました。それによって、データの蓄積も進んできました。現在は、種を限定すれば、いつ頃赤潮が起きるのか、経験的な理解もすすんで来ています。しかし、赤潮の原因種は、時々入れ替わることがあります。その場合、それまでの経験は役に立たないこととなります。そういったこれまでと違う赤潮原因種の中には、有明海の外側に起源があるとされるものもあります。従って、有明海の赤潮の発生機序の理解のためには、実は有明海の中だけを調査していても分からない部分があります。本セミナーでは、有明海での研究されてきた日本人研究者、東シナ海、黄海を通じて有明海とも関わりのある、韓国、中国の微細藻類研究者を招待して、各国沿岸での赤潮の実態、最先端研究事例について交流するために開催しました。（次ページへ続く）



写真：セミナーの様子

セミナーの参加者は、4ヶ国から計32名と決して多くはありませんでした。それは、セミナーの発表が、全て微細藻類（植物プランクトン）に限定されたからかもしれません。しかし、その内容は、分類、個体群動態、地理的分布、古生物学、分子生物学など多岐にわたっており、充実した議論を行う事が出来ました。

セミナーは、今回をきっかけにして、今後も継続的に開催していくことになりました。また、今後の共同研究についても、すでにいくつか提案を頂き、例えば日韓の海苔養殖場における珪藻群集についての共同研究が、すでに韓国で申請されたました。従って、今回のセミナーは、国際交流の促進だけでなく国際共同研究への展開も多いに期待できるものになりました。

有明海研究は、社会問題と関連づけられることが多いのですが、それらの問題が一段落付いたときに、研究が終わるわけではありません。長い間に渡って海を利用していくためには、調査を継続していきながら、生態系への理解を深めること、社会を含めて海を取り巻く環境と生態系そのものの変化に柔軟に対応して海を保全あるいは管理していくことが大切です。たとえ有明海の研究であっても、他の沿岸域の研究者と交流し、研究をさらに展開していくことには意味があります。今回のセミナーをきっかけとして研究のさらなる展開を目指したいと考えています。（片野俊也）



写真：セミナー翌日には、佐賀大学観測タワーの見学を行いました。



写真：ノリ工場の見学も行いました。

## 地域防災に関する特別講演会を、開催しました。

低平地研究会 水専門部会では、佐賀大学プロジェクト研究所・地域防災技術研究所、佐賀大学低平地沿岸海域研究センター、佐賀大学理工学部都市工学科の共催で、11月22日に特別講演会を開催いたしました。会場は、理工学部4階2階の都市工2番教室。15時からの講演会に国・市の災害危機管理担当者や学生など15名が参加しました。ご講演いただいたのは、徳島大学教授の中野晋（なかの すすむ）先生。中野先生は、徳島大学 環境防災研究センターで副センター長を務める傍ら、四国防災共同教育センター 副センター長としてもご活躍されています。沿岸域工学分野のご出身ということもありまして、今回は、沿岸域における大規模災害について防災の観点からお話頂きました。

タイトルは「大規模災害時の地域継続戦略～大規模災害時の企業と公益機関のBCP～」。BCPはBusiness continuity planningの頭文字をとったもので、和約すれば「事業継続計画」。災害などで影響を被った場合に、その被害を出来るだけ小さく

し、事業を継続させ、早く復活するための計画を予め策定しておくものです。中野先生からは、マグニチュード8以上の地震の頻発や風水害の事例についてご紹介があり、我々が直面している「巨大災害の世紀」についてのご紹介がありました。つづいて、東日本大震災で影響を被った事業所の対応事例についてご紹介頂きました。BCPに基づいて業務を絞って成功した例や、事前に他地区の同業者と提携を結び、災害に備える対策などについてもご紹介頂きました。企業については、事前にBCPを建てておくことで、災害時にも重要事業を中断せず、限られた資源を元に短期間で再開させ、競合他社への顧客流出や企業評価の低下を防ぐことができます。民間企業ではBCPについては認知が高くなり、多くの企業で取り組まれているそうです。

一方で、これからは公益機関におけるBCPが課題になると、中野先生は指摘します。行政や病院などでは、災害発生と同時に生命存続に関わるような応急業務が多く発生し、またそれらに圧迫されて通常業務の復旧が遅れる傾向があります。BCPを予め策定しておくことで、発災時直後から速やかに応急業務へ着手することが可能になりますし、通常業務の復旧へもスムーズに移行できます。学校などでは、児童・生徒の安全を守ることや、避難所を設営・運営すること、早期に授業を再開することが大切ですから、これらを災害ステージ（即時・緊急・応急・復旧）と分けてBCPを設定することが有効なのだそうです。

最後には、「事業所レベルでBCPに取り組むことが、地域全体の危機管理能力をレベルアップできる」とお話いただきました。多くの事業所や公益機関がBCPを策定しておくことで、それらの組織に属している人の命を守ることができます。しかし、これらの組織に属していない高齢者や女性なども多く居ます。「この事業所や公益機関でのBCPの徹底と同時に、組織に属していない個人をどのように守っていくのかも考えなければいけません」と語っていただきました。

講義後には15分の質疑応答の時間を設けました。「BCP策定後の見直しや修正のモチベーションをどのように維持していくのか」「学生に地域防災の講義をどのように伝えたらよいのか」など、活発なご質問が飛び交っていました。（長濱祐美）



写真：講演会会場の様子。少人数ながら密度の濃い講演会となった。



写真：講師の中野晋教授。東日本大震災の事例を多くご紹介頂いた。



写真：講演会には、佐賀大学の学生の他、国や市などの防災担当者の参加もあった。

## 「前海を考えるシンポジウム第2回 ～有明海研究所構想について～」

11月10日（日）に、鹿島市エイブル研修室において、低平地沿岸海域研究センター主催、鹿島市共催で、「前海を考えるシンポジウム第2回 ～有明海研究所構想について～」(コンビナー 速水祐一・藤井直紀)を開催しました。「前海を考えるシンポジウム」は昨年が続いて今年度が二回目で、佐賀県における産学官包括連携協定6者協定事業の一環として実施したものです。今回のシンポジウムでは、佐賀県、鹿島市が長年にわたって招致をしてきた有明海研究所構想を題材に、市民とともに考える場としました。コンビナーによる趣旨と背景説明をしたのち、佐賀県有明海再生・自然環境課の久保氏から、佐賀県と有明海研究所構想について、続いて、鹿島市における有明海を生かした活動と研究所への期待について、鹿島市役所の中川氏から話題提供いただきました。その後、鹿島市民の樋口氏から、有明海の保全のための教育の重要性と、そのための拠点施設作りの必要性についてお話しいただき、最後に、谷津干潟自然観察センターの柴原氏から、先進事例である谷津干潟における取り組みの内容や、現在に至るまでの経緯などについて紹介いただきました。これら5題の話題提供の後で、会場の参加者からのコメントを交えて座談会を行いました。座談会では、研究所のありかたとしては、自然科学にとどまるものではなく、有明海とともに生きてきた地域の生活文化の継承にも役立つような、施設であるべきだとの意見が多く出ました。また、諫早湾開門調査、荒尾干潟のラムサール条約登録など、有明海をめぐるダイナミックに社会が動いていく中で、鹿島においてもこれまでの実績を生かして積極的な活動をしていくべきだという意見が出されました。さらに、有明海研究所といわず、国際干潟研究所あるいはミュージアムとして、全国、世界から人が集まることで、地域の活性化に繋がるような施設ができればという意見もありました。参加人数は40名と多くはなかったですが、議論は盛り上がり終了予定を20分超えて続きました。前海を考えるシンポジウムは来年度以降も継続して開催し、有明海に関して市民と研究者が共に考え、この海の再生に向けて共同した取り組みの実践へと発展させていきたいと考えています。(速水祐一)



写真：シンポジウムの様子

## 有明海学—市民の科学講座開催報告

佐賀大学の“有明海”を研究しているグループでは、2011年から鹿島市干潟展望館と協働して「有明海学—市民の科学講座」を開催してきました。しかし、この講座の存在がなかなか市民に伝わらず、参加者が少ない状況でした。そこで本年度はより多くの方々に参加して頂くべくかしま市民立楽修大学と共催いたしました。かしま市民立楽修大学は鹿島市生涯学習センターエイブルや鹿島市図書館の指定管理者となっている団体で、多くの市民講座や子供向けイベントを開催しています。



写真：カキ礁の見学

さて、「有明海学—市民の科学講座」は有明海の環境保全や沿岸地域における持続可能な生業や生活のあり方について地域住民に理解が広まることを目的として開講しています。一般的な“講義・座学”だけではなく、生物を使った実験や実習、干潟や牡蠣礁、海苔筏など“現場”を実際に観て体験出来るような講座を目指しました。幸い、天候にも恵まれ、開設講座5回ともほぼ予定通りに行うことが出来ました。講師の方々をはじめ、準備・材料で協力して頂いた皆様、受講の皆様に感謝しています。

今年度の「有明海学—市民の科学講座」は下記に示しますように、有明海に生息する生物、産業として重要な生物を中心とした講座にしました。有明海の代表的な生物である「ムツゴロウ」を解剖し、その後は実際に焼いて食してみる、干潟の生物を探して分類の方法を学習してみる、いま鹿島市ではやりのクラゲに触れてみる、有明海で重要な水産業となっている海苔や牡蠣の様子を実際に観る、など一般の方にはなかなか新鮮な内容となったのではないかと思います。

受講生は昨年までの平均6名程度から平均12名程度に増えました。この人数は少ないように感じるかもしれませんが、材料の準備や小舟に乗船出来る人数の都合上、ちょうど良い数となっています。今回は比較的年配の方が多かったです。若い方々に参加して頂くためにはさらなる工夫が必要なのかもしれません。受講生の皆様からのご意見ご要望をお伺いしながら、スタッフの中で精査して来年も開催できればと考えています。皆様のより一層のご協力、どうぞよろしくお願い致します。

なお、「有明海学—市民の科学講座」の本来の目標は、「市民が主体となって学び、市民による多様で継続的な実践活動につながるような人材の育成を目指す」ことにあります。このような講座を開催するだけでなく、これまで3年間に参加された方々とともに、有明海の環境モニタリングを行ってみたり、環境学習やエコツアーの企画・実践等についての活動に展開できればと考えています。（藤井直紀）

## 第9回低平地に関する国際シンポジウム (ISLT2014) 概要受付 延長のお知らせ

先のニュースレターにてお知らせしたとおり、2014年9月29日～10月1日の日程で、第9回低平地に関する国際シンポジウム (ISLT2014) を佐賀大学で開催します。このたび、多数の参加者を募集するため、論文概要の提出期限を来年1月24日 (金) まで延長いたしました。

- 論文概要の応募締め切り (延長) : 2014年1月24日
- 概要審査の結果通知 : 2014年1月31日 (予定)
- 提出書類 : 200～300ワードの英文アブストラクト (PDF形式)
- 提出先 (事務局) : 希望テーマ、発表タイトル、詳しい連絡先、emailアドレスを明記の上、E-mailの添付ファイルとして Ms. M. Yahiro ([secretariat@islt2014.com](mailto:secretariat@islt2014.com))宛お送りください。なお、ファイル名を名字 (ローマ字) .ISLT2014.Abstractとしてください。多数の皆様方による研究論文の投稿をお待ちしております。奮ってご応募ください。詳しくは、<http://www.islt2014.com/call.html>をご覧ください。

### 着任のご挨拶

10月からセンター講師として着任いたしました、長濱祐美 (ながはま ゆみ) です (右写真)。沿岸環境研究分野の山西博幸教授の元で、河川干潮域の構造物や排水が周辺生態系に与える影響についての研究を進めています。



私は約4年前の2010年3月に、東北大学大学院工学研究科で博士 (工学) を取得しました。当時の研究テーマは、干潟に生育する海草コアマモが干潟底生生態系へ与える影響。底生動物の同定や水質・底質の測定、炭素・窒素安定同位体比や脂肪酸組成を用いた食物網解析を通じて課題に取り組んでいました。出身大学が東海大学海洋学部水産学科であることもあり、工学系といっても水環境学や生態学が専門です。

2011年4月から当センターに着任するまでの2年半の間は、北海道大学高等教育推進機構CoSTEPで博士研究員を務めていました。CoSTEPでは、サイエンス・カフェの運営や広報誌、フェイスブックページの作成などの市民と研究者をつなぐ取り組みを通じ、科学技術コミュニケーターの教育・研究に携わりました。異分野に飛び込むきっかけになったのは大学院生のときの経験。理系分野への女性参画を推進する「東北大学サイエンス・エンジェル」として活動する中で、研究アウトリーチや学生指導などの必要性を痛感しました。今後、男女共同参画や広報の分野でも触媒になることができればと思っています。

最後になりますが、低平地沿岸海域センターの発展に資することができるよう誠意努力していきます。ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

#### 編集後記

12月20日の期限までに、開門調査は行われませんでした。諫早湾干拓事業の問題は、より複雑になり解決までには、時間がかかることも考えられます。しかし、有明海の問題は、干拓事業だけでありませんし、海の状態も刻々と変わっていきます。問題の早い解決を願いつつ、海の研究を進めていきたいと思っています。片野

#### 発行・編集

佐賀大学低平地沿岸海域研究センター  
〒840-8502 佐賀市本庄町1番地  
TEL 0952-28-8582 0952-28-8846  
FAX 0952-28-8189 0952-28-8846  
ホームページ <http://lit.saga-u.ac.jp>  
(平成25年12月27日発行)